

葉月というのは、元は旧暦の八月を差す言葉であり、旧暦の八月であれば、確かに葉は紅葉し、稲の穂は張り、月見月の別名というのも納得がいくというもの。

ならば、今の葉月は何の意味も持たない、ただの飾りの言葉でしかないのだろうか。世間的にはそうなのかもしれない。

新暦で生きる今の人々には、そも由来などといったものは関係ないのかもしれない。でも、私にとって、八月とは。

私にとって、葉月とは。

「妖夢、早くしないと置いていくわよ」

襖が開いた音が聞こえなかった割に、随分と鮮明に聞こえた声。噂をすればなんとやら。振り返ってみると、そこには襖から上半身を生やした幽々子様の姿があった。

なるほど、これでは襖の開く音が聞こえなかったのも納得がいく。

いや、そうじゃなくて。

改めて、襖から生えた主の姿を見る。

その身に纏うのは、いつもと同じ薄い蒼の着物。生地を描かれる柄は季節、曜日、更にはその日の天候までも考慮しているらしいが、今日の柄は流水を模したものだった。それほどしっかりと着付けていない所為で、動く度に袖や裾が、肩下まで伸びた、緩く波打つ薄桃色の髪と一緒にふわりふわりと揺れ動く。正直、目のやり場に困るのだけだ。

「どうしたのよ、そんな呆<sup>あき</sup>れたり怒<sup>あ</sup>ったり、かと思えばいきなり目を背<sup>そむ</sup>けたり、生<sup>な</sup>えたり抜<sup>ぬ</sup>いたり破<sup>やぶ</sup>れたり、忙<sup>いそ</sup>しそうね」

「言<sup>い</sup>いたい事は色々とありますが、とりあえず、入<sup>い</sup>ってくるならちやんと襖<sup>あき</sup>を開<sup>あ</sup>けてからに  
してください」

「あら、あらあら」

まるで今初めて自分の状態に気付いたとでもいうような素<sup>そ</sup>振<sup>ぶ</sup>りを見せて、幽<sup>ゆう</sup>々<sup>々</sup>子<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>の上半  
身<sup>み</sup>が襖<sup>あき</sup>の向<sup>むか</sup>こうへと沈<sup>しず</sup>んでいく。

かと思えば、次<sup>つぎ</sup>は取<sup>と</sup>っ手<sup>て</sup>の所<sup>ところ</sup>から唐<sup>とう</sup>突<sup>とつ</sup>に色<sup>いろ</sup>の白<sup>しろ</sup>い、細<sup>こ</sup>い手<sup>て</sup>が生<sup>な</sup>えてきた。

「切<sup>き</sup>つてもいいですか」

「やあね、冗<sup>じやう</sup>談<sup>だん</sup>よ」

三<sup>さん</sup>度<sup>ど</sup>目<sup>め</sup>の正<sup>せい</sup>直<sup>ちく</sup>とでも言うべきか、今<sup>いま</sup>度<sup>ど</sup>こそすつと襖<sup>あき</sup>が横<sup>よこ</sup>に滑<sup>すべ</sup>る。

当<sup>た</sup>然<sup>ぜん</sup>の事<sup>こと</sup>ではあるが、そこには幽<sup>ゆう</sup>々<sup>々</sup>子<sup>こ</sup>様<sup>さま</sup>が立<sup>た</sup>つていた。ふわりと漂<sup>た</sup>うように浮<sup>う</sup>いていた、  
と言<sup>い</sup>った方<sup>かた</sup>が適<sup>てき</sup>当<sup>とう</sup>だろ<sup>う</sup>か。

「なんだ、支<sup>し</sup>度<sup>たく</sup>、もう済<sup>す</sup>んでいたのね。いつまで経<sup>た</sup>つても出<sup>で</sup>てこないから、てつきりこ、こ  
ろ……ころ——」

「勝<sup>かち</sup>手<sup>て</sup>に人<sup>ひと</sup>を殺<sup>ころ</sup>さないでくださいよ」

「転<sup>ま</sup>がさされているかと思<sup>おも</sup>ったわ」

「そっち!」

「いやねえ、限りある命は大切にしなさいって、この間閻魔えんま様に言われたのよ。所謂慈悲いわゆるじひの心というものね。という訳で妖夢、試しにお団子だんごを作ってみたの。食べる?」

「前振りを入れないと団子の一つも出せないのですか、あんたは」

「隠し味に走野老はしりどろを入れてみたわ」

「……」

とんだ慈悲の心だった。というか、量によっては死ぬんじゃないのかな、それは。きつと、幽々子様の中にあるのは慈悲じゃなくて茲非とかだ。心が無い。ひよつとすると、亡霊は皆こんな性格なんじゃなかるうかとさえ思えてきてしまう。

「やあね、冗談よ」

こちらとしては、呆れるばかりなのだけれど。

それでも幽々子様は本当に楽しそうに笑ったまま。もつとも、普段からその表情が崩れるような事はほとんどなく、試しに怒っている所や泣いている所を想像してみたが、やはりと  
いうか、笑っている顔以外は出てこなかった。笑いすぎて泣いている所なら、嫌と言う程見  
た事はあるのだけれど。

「まあ、でも」

仕切り直すように、改めて私の方を見ながら、幽々子様が言った。

「支度が出来ているのなら、そろそろ行きましようか」

「そう、ですね」

詰まってしまうた言葉を誤魔化すように、幽々子様から顔を背けて外を見やる。

既に太陽は西の山裾にその身を降ろしている。空は朱から紫へ。顕界では、蟬達がその活動の場を夜の虫達へ譲ろうとしているところだろうか。

確かに、いい頃合だと言える。今から発てば、そう急がずとも時間には間に合うだろうし、準備の事なども考えれば、早めに出ておくに越した事はない。

解っている。解ってはいるのだけれど。

「妖夢」

と。

不意に、声を掛けられた。

どこまでも優しい、柔らかな声。全てを見透かしているかのような、澄んだ声。

応えるべきか、振り返るべきか。だがそれらの結論が出る前に、そっと、肩越しに白い手が伸びてきた。同時に背に受けた、僅かな重み。全身を包む、春の午後の日溜りのような、暖かな匂い。

「妖夢」

再度、幽々子様が私の名前を呼んだ。

「大丈夫」

大丈夫。

それだけ。たったの一言。音にしてみれば、僅かに五つ。でも耳元で、囁くように紡がれたその言葉は、どこか揺らいでいた私の心の奥底にすんと落ちて、そして広がっていく。

大丈夫。

声には出さず、繰り返す。

確かめるように、ゆっくりと。

「幽々子、さま」

知らず、声が出る。けれど、重ね合わせようとした手は虚しく空を切り、気付けばつい先程まで全身を包み込んでいた暖かな匂いも、蜉蝣のように消えてしまっていた。

今度こそ振り返ってみれば、何時の間にも移動したのだろうか、幽々子様は部屋の入り口、開けたままになっていた襖に手を掛けて、こちらに背を向けていた。

「ほら、行くわよ」

振り向きもせず、それだけを言うと、幽々子様の姿は襖の向こうへと消えてしまった。

少しだけ早口になったその声が、どこか少し上ずっているように聞こえたのは、ひよっとすると照れていたのだろうか。

「——大丈夫」

もう一度だけ小さく呟いて、私は立ち上がる。

「幽々子さま、待つてくださいいよー」

「貴方がいつまでものんびりしているからでしょうに。そもそも妖夢には足りないものが多すぎるのよ。速さとか、速さとか、あと速さとか」

「いや、そんなに速さだけ身についても」

「早さとか」

「字面だけ変えてどうするんですか。というかそれで私にどうしろというんですか」

「ちよっぱやね」

「幽々子様、死語って知ってます？」

「妖夢、ここは冥界よ」

言葉の幽霊とか、見た事が無いです。

本当に、普段から何を考えていればこのようになるのか、甚だ検討が付かない。

「中々似合っているじゃない、それ」

でも、言われっぱなしなのは、やっぱり悔しいもので。

だから、私の頭、いつものリボンの代わりに付けられた、少し伸びた前髪を纏める小さな花の髪飾りを見て、そんな事を言った幽々子様にか言い返してみたくなるのも、まあ、道理だろう。

「当然です」

「あら、あらあら」

意外そうな顔をした後、またいつもの鈴を転がすような声で幽々子様が笑う。思惑通りと  
いった所だろうか。

いよいよ外は宵闇が広がっていて、まだいくらか先まで見通せるにも関わらず、不意に伸  
ばした自分の手の先が見えなくなるような、不思議な感覚に囚われる。

確かにのんびりしすぎていたようで、こうなってしまうては少し急がなければ間に合わな  
くなってくる。

「それじゃあ、行きましようか」

後から出てきた幽々子様が、からころと下駄を鳴らした。

普段は移動の際もふわふわと漂うようにしているのだが、これもまた、幽々子様の言う所  
の風情というものなのだろう。

さて、ここから目的の場所までは、いくらか時間が掛かる。

その間に、一つ、話をしよう。

私達が今日、これから出向く事になった、その理由。

心優しい彼女との出逢いと、そして、別れの話。